

# 南琉球与那国方言の撥音化と喉頭化音化\*

—音韻変化の条件と相対年代—

中澤 光平

kohein@shinshu-u.ac.jp

キーワード：与那国方言 音韻変化 音韻条件 相対年代 相対的強弱

## 要旨

沖縄県八重山郡与那国町で話されている南琉球語与那国方言には、Nnu「昨日」、NKaCi「昔」やTa「蓋」、Kuru「袋」のように、通時的に狭母音を含む音節の撥音化と喉頭化音化（あるいは促音化）が広く観察される一方、niCi「北〈ニシ〉」、nuTi「横糸〈ヌキ〉」やkiCi「崖〈キシ〉」、huCi「蓬〈フツ〉」のように、狭母音であっても撥音・喉頭化音（促音）に変化していない例も見られる。また、muN「麦」（cf. Ndu「溝」）やCiN「死〈シニ〉」（cf. Nni「死んで」）のように、複数の音節に変化を生じる可能性がある場合、どの音節が変化するかについても明らかではない。そのため本稿では、公刊された資料に基づき、与那国方言の撥音化と喉頭化音化の条件と相対年代について分析・考察を行う。その結果、次の2つの条件が音変化に関わることがわかった：1. 後続音節の母音の広さ、2. 語の長さ。このうち、母音の広さについては、与那国方言だけでなく、南琉球諸語、さらには琉球諸語や本土方言でも広く音韻変化の条件となっている可能性があることについても述べる。

## 1. 本稿の目的<sup>1</sup>

日本最西端の島である与那国島で伝統的に話されている与那国方言（ドゥナンムヌイ）では、ンヌ「昨日」、ンカチ「昔」、ツタ「蓋」、ツクル「袋」のように、通時的に狭母音を含む音節の撥音化と喉頭化音化（あるいは促音化）が広く観察される。しかしながら、その条件については必ずしも十分明らかにされているとは言えない。そのため本稿では、与那国方言の撥音化、喉頭化音化が生じる音韻条件などについての通時的分析を行う。併せて、日琉諸語に見られる類似的現象との関係を考察する。

---

\* 本稿は国立国語研究所「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」オンライン研究発表会（2021年度後期）（プロジェクト名：対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法、リーダー：窪田晴夫）で「南琉球与那国方言の撥音化と喉頭化音化：音韻変化の条件と相対年代」と題して発表した内容を元としている。有益なコメントをくださった参加者の皆様にお礼申し上げる。また、本稿はJSPS若手研究「日本語諸方言の接触地域における系統関係の解明」（研究課題番号21K12993）の研究成果の一部である。

<sup>1</sup> 本稿執筆の直接のきっかけは松森（2021）である。松森（2021）は沖縄首里方言に見られる撥音化に2種類あることを指摘し、それぞれ音条件が異なることと、（北）琉球祖語の母音再建への提言を行っている。それを受け、同様に撥音化（と喉頭化音化）が見られる与那国方言では条件はどうなっているか、また喉頭化音の条件はどうか、さらには広く南琉球（祖）語の母音体系はどうかについて整理する必要があると考えたことによる。

## 2. 与那国島および与那国方言について<sup>2</sup>

### 2.1. 与那国島

与那国島は沖縄県八重山郡に属し、八重山列島を構成する。沖縄本島からは南西へ約 509 km の距離があり、八重山列島の中心的な島である石垣島からも約 127 km 隔たっている。日本最西端に位置し、台湾とも約 111 km の距離にあり、西端の西崎（イリサティ）からは台湾が見えることもある。与那国町は与那国島の一島<sup>3</sup>からなり、祖納、比川、久部良の3つの集落がある。面積は 28.96 km<sup>2</sup> で人口は 1694 人である（令和 4 年 2 月末現在）<sup>5</sup>。

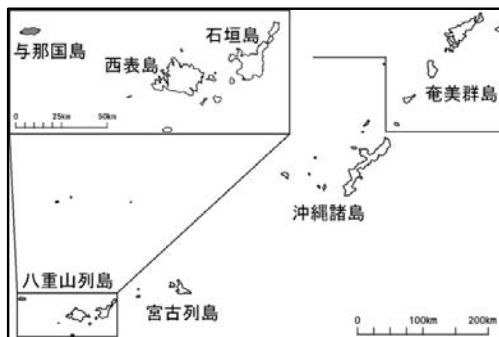


図 1. 与那国島の地理的位置<sup>4</sup>

### 2.2. 与那国方言

与那国方言は与那国島の主に 60 代以上の高年層で話されている。久部良で沖縄本島の影響が強いことを除けば、集落間の方言差はほぼない。与那国方言は母音音素が /a/, /i/, /u/ の 3 つ、子音音素が /P/, /b/, /m/, /t/, /T/, /d/, /n/, /r/, /C/ [tʰ], /s/, /k/, /K/, /g/, /ŋ/, /h/, /ʔ/ の 16 個で他に半母音音素 /j/, /w/ と撥音 /N/ を有する（大文字の /P/, /T/, /K/, /C/ は無気喉頭化音）<sup>6</sup>。促音相当の重子音と長音は音声的には見られるものの、基本的に自由変異であり、音韻的ではないと考えられる。無気喉頭化子音 /K/, /T/ は /k/, /g/, /t/, /d/ と弁別的である（[例] Ka「司」、ka「皮」、ga「我」）。A 型、B 型、C 型の三型アクセント体系であり、A 型は概ね高平調、B 型は概ね低平調で、C 型は A 型に似るが後続するアクセント単位のピッチを下げる（上野 2010）。

### 2.3. 与那国方言に見られる音変化

#### 2.3.1. 与那国方言の狭母音化

与那国方言は、日本最西端の国境の島なだけあり、日琉諸語の中でもとりわけ著しい音変化が生じていて、他の琉球諸語と同様に \*e > i, \*o > u という狭母音化も生じている。

- (1) a. ʔki ~ ki (毛), udi (腕), nabi (鍋)  
 b. mumu (腿), uja (親), sudi (袖)

<sup>2</sup> 2.1～2.3 については与那国町教育委員会（2021: 29–30）や中澤（2022a: 90）も参照。

<sup>3</sup> 厳密には、西崎の北北西にトゥイシと呼ばれる島（岩）がある（与那国方言辞典編集委員会編 2021: 3）。

<sup>4</sup> 「白地図専門店」（<http://www.freemap.jp/item/okinawa/okinawa2.html>）の無料素材を加工した。

<sup>5</sup> 以上の情報は与那国町ウェブサイト（<https://www.town.yonaguni.okinawa.jp/docs/>）から引用した（2022 年 4 月 20 日にアクセス）。

<sup>6</sup> /ʔ/ は音節の切れ目を表す音素として導入する。破擦音を表す C は子音一般を表す C（およびアクセントの C 型）と紛らわしいが、文脈により混同の恐れはないと考え特に表記は変更しないこととした。語頭では /k/ と /K/, /t/ と /T/ の喉頭化の有無が弁別的だが、語中では基本的に喉頭化音 /K/, /T/ になる。

(かりまた 2013: 65–66 より抜粋)

\*e > i, \*o > u の狭母音化が生じている一方、狭母音 \*i, \*u を含む音節は撥音化あるいは後続拍の子音を喉頭化音化している。

- (2) a. nnu [Nnu] (昨日), mmu [Nmu] (雲), ŋkatzi [NKaCi] (昔), nsu [Nsu] (味噌)  
 b. t'a [Ta] (蓋), t'u [Tu] (人), k'uru [Kuru] (袋), k'imunu [Kimunu] (漬物)

(かりまた 2013: 68 より抜粋)

ところが、(1) と異なり、(2) の変化は無条件に起きているわけではない。(3) のように撥音化、喉頭化音化していない例も多く見つかる。

- (3) niŋi [niCi] 「北 (ニシ)」(池間 2003:96), nuŋi [nuTi] 「横糸 (横)」(同:361), kiŋi [kiCi] 「崖 (キ)」(同:76), huŋi [huCi] 「蓬 (フツ)」(同:364)

(アクセントを示す傍線は省略した)

(3) はそれぞれ \*NCi 「北」、\*NTi 「横糸」、\*Ci 「崖」、\*Ci 「蓬」が期待されるがそうっていない。このように、撥音化、喉頭化音化については適用の条件があると考えられ、どのような条件で生じるのかを明らかにする必要がある。

### 2.3.2. 共通語と与那国方言の音対応

撥音化、促音化の議論に入る前に、与那国方言の音変化を概観するため、共通語と与那国方言の音対応を整理する。

表 1. 共通語と与那国方言間の音対応 (中澤 2022a: 91–92 より)

共通語	与那国方言	語例
/e/	/i/	k <sub>i</sub> 「毛」、t <sub>i</sub> 「手」、h <sub>i</sub> ra 「籠」、u <sub>i</sub> 「腕」、u <sub>i</sub> 「上」、h <sub>u</sub> i 「笛」
/o/	/u/	n <sub>u</sub> 「野」、h <sub>u</sub> 「穂」、u <sub>u</sub> ja 「親」、d <sub>u</sub> ru 「泥」、s <sub>u</sub> di 「袖」、k <sub>u</sub> i 「声」
/a'o/, /a'u/	/u/	s <sub>u</sub> 「竿」、n <sub>u</sub> ruN 「直る」、k <sub>u</sub> N 「買う」、a <sub>u</sub> ruN 「洗う」
/sj/ [ʃ]	/s/	s <sub>u</sub> bu 「勝負」、s <sub>u</sub> ju 「醤油」、saN <sub>su</sub> 「山椒」、i <sub>sa</sub> 「医者」
/z/, /zj/	/d/	d <sub>a</sub> 「座」、d <sub>i</sub> N 「膳」、ka <sub>d</sub> i 「風」、d <sub>u</sub> Tu 「上等」、tiN <sub>du</sub> 「天井」
/j-/	/d-/	d <sub>u</sub> 「湯」、d <sub>a</sub> ma 「山」、d <sub>u</sub> mi 「嫁」、d <sub>u</sub> ru 「夜」、d <sub>u</sub> muN 「読む」
/r-/	/d-/	d <sub>a</sub> Ku 「楽」、d <sub>a</sub> Kju 「辣非」、d <sub>u</sub> ja 「牢屋」、d <sub>u</sub> suKu 「蠟燭」
/w-/	/b-/	b <sub>a</sub> ra 「藁」、b <sub>a</sub> ruN 「割る」、b <sub>a</sub> ruN 「笑う」、b <sub>a</sub> TaruN 「渡る」
/-w-/	∅ (ゼロ)	a [a:] 「粟」、ka 「皮」、tara 「俵」、dwaruN [d <sub>u</sub> aruN] 「弱る」
/-k-/	/-g-/	haga 「墓」、sagi 「酒」、dugu 「横」、daguN 「焼く」

/-g-/	/-ŋ-/	suŋa 「生姜」, kaŋaN 「鏡」, aŋiruN 「上げる」, niŋuN 「願う」
/kj-/ , /cj-/	/s-/	su 「今日」, sa 「茶」, saKuCi 「嫡子」, suga 「急須 (チヨカ)」
/-kj-/ , /-cj-/	/-T-/	huTaji 「吹上餅 (フキヤゲ)」, huTa 「包丁」, kaTa 「蚊帳 (カチヨウ)」
/ki-/ , (/ci-/), /cu-/	/Ci-/ [tʃi-]	Cimu 「肝」, Ciri 「霧」, Cira 「面」, Cibu 「壺」
/-ki-/ , /-ci-/ , /-cu-/	/-Ti-/	iTi 「息」, uTi 「内」, muTi 「餅」, siTi 「節」, baTi 「罰」
/gi/ , (/zi/), /zu/	/di/	kudj 「釘」, hudj 「風習 (風儀)」, kidj 「傷」, dudj 「上手」
/si/ , /su/ , /hi/	/Ci/	Cima 「島」, huCi 「星」, Ci 「巢」, daCimuN 「休む」, Ci 「火」
/ku/	/hu/ [ɸu]	huN 「組」, hura 「鞍」, huru- 「黒」, huCimuCi(ki) 「桶」
/-ri-/	/-i-/	haj 「針」, uj 「瓜」, amaj 「余り」, hagaj 「秤」

表1では語頭と語中・語末で対応が異なる場合、語頭を /ki-/、語中と語末を /-ki-/ のように示した。

表1のように、与那国方言では、共通語の /-k-/ に /-g-/ が、/-g-/ に /-ŋ-/ が対応するが、撥音の後では、共通語の /-k-/ に /-K-/ が、/-g-/ に /-g-/ が対応する。

- (4) a. mukasi :: NKaCi 「昔」, jubiku 「湯引く」 :: duNKuN 「茹でる」, haziku :: haNKuN 「弾く」  
 b. hige :: Ngi 「髭」, nigana :: Ngana 「ニガナ」, jusugu :: duNguN 「濯ぐ」

(共通語 :: 与那国語)

また、語中であっても、母音の無声化に関わる場合は共通語の /-k-/ に与那国方言の /-K-/ が対応する。

- (5) cikara :: s̄jKara 「力」, ikusa :: iK̄uCa 「戦」, tasukeru :: tas̄jKiruN 「助ける」

(4, 5) のように、撥音、無声化母音がある場合、表1とは異なる音対応が見られる点に注意する必要がある。

## 2.4. 本稿のデータの概要

本稿で用いるデータは原則として池間 (2003) から引用し、引用元のページを初出の場合にのみ語の後に記す。若干ながらほかの資料からも引用するが、語形の揺れなどによる恣意性を排除するため、筆者自身の調査データは用いない。

ただし、表記については混乱と不統一を避けるため、3節以降は2.2.で挙げた音韻解釈による表記に統一した。元の表記は池間 (2003) その他の該当する箇所を参照されたい。

<sup>7</sup> 東京など、語中の /-g-/ が鼻濁音となる地域もあるが、ここではわかりやすさと与那国方言の鼻濁音の強調のため、通常の /-g-/ の形で提示した。

### 3. 与那国方言の撥音化

与那国方言では共通語と異なり、撥音が語頭にも立てる。したがって撥音は語頭、語中、語末すべてに現れる。共通語との音対応から与那国方言で撥音化したと考えられる例を、語頭、語中、語末にわけて確認する。

#### 3.1. 語頭での撥音化

語頭での撥音化は次のような語で見られる。

- (6) a. Ndai 「潮干狩り〈イ<sup>ナ</sup>リ〉<sup>8</sup>」(p.146), NdaN 「出す〈イ<sup>ス</sup>〉<sup>9</sup>」(p.201), NduguN 「動く〈イ<sup>ク</sup>〉<sup>10</sup>」(p.44), Nma 「馬」(p.48), Nni 「米〈イ<sup>ネ</sup>〉<sup>11</sup>」(p.132), …
- b. NburuN 「絞る」(p.155), Ndai 「左」(p.292), Ngi 「髭」(p.291), Nmu 「雲」(p.111), Nni 「船」(p.305), Nnu 「昨日」(p.98), …
- c. Ngana 「苦菜」(p.257), Nnu 「蓑」(p.333), NKaCi 「昔」(p.336), Nsu 「味噌」(p.331), …

#### 3.2. 語中での撥音化

語中での撥音化は次のような語で見られる。

- (7) a. duNguN 「濯ぐ」(p.365), muNbuN 「結ぶ」(p.339), maNgi 「睫毛」(p.323), aNnai 「取引〈アキイ〉」(p.242), …
- b. aNda 「油」(p.19), kaNda 「蔓」(p.79), aNKaruN 「預かる」(p.155), naNKuN 「靡く」(p.251), …
- c. kaNnari 「雷」(p.87), taNna 「田螺〈タミナ〉<sup>12</sup>」(p.205), adaNKuN 「宥める〈アサムク〉<sup>13</sup>」(p.249), …

<sup>8</sup> 本土諸方言ではイサリのように清音化しているが、琉球諸語では伊江島方言 ?i3aidi 「漁火」(生塩 2009: 46) や多良間方言 ida| (渡久山・セリック 2020: 69) のように濁音に対応する形式となっている。

<sup>9</sup> 伊江島方言 ?i3afuŋ (生塩 2009: 46) や伊良部方言 idasi (富浜 2013: 65) のように語頭に母音がある形式以外にも、首里方言 ?nza=sjun【?nd3afjuŋ】(国立国語研究所 1963: 432) や鳩間方言 ?ndzasuŋ (加治工 2020: 1830) のように口蓋化によって \*d が破擦化している形式が琉球諸語に広く見られるから、琉球祖語では \*idas- だったと推定される。

<sup>10</sup> 伊江島方言 ?i3ut'fuŋ (生塩 2009: 46) のように語頭に母音がある形式以外にも、首里方言 ?nzu=cjun【?nd3ut'fuŋ】(国立国語研究所 1963: 433) のように口蓋化によって破擦化している形式が琉球諸語に広く見られるから、琉球祖語では \*igok- だったと推定される。

<sup>11</sup> 首里方言 ?nni 「稲」(国立国語研究所 1963: 432) と mee 「飯。米の飯」(国立国語研究所 1963: 366) のように、mai は「米、飯」に当たると考えられるが、意味上の混乱があったためか、与那国方言では「稲」を mai (池間 2003: 37)、「米」を Nni と言う。

<sup>12</sup> 「たみな (田螺の意) 田螺。たにし。長崎県佐世保・壱岐・熊本県天草島・鹿児島県肝属郡・南島。」(東條編 1951: 514)。

<sup>13</sup> スカスやダマスが諸方言で「子供をあやす」という意味で使われるのと同じ意味変化と考えられる(アヤスにも「騙す」という意味がある)。

## 3.3. 語末での撥音化

語末での撥音化は次のような語で見られる。

- (8) a. muN「麦」(p.48), haN「足〈ハギ〉」(p.12), uN「団扇〈オギ〉」(p.46), tuN「妻〈トシ〉」  
(p.224), miN「水」(p.330), iN「伊勢海老〈エビ〉」(p.31), baraN「蕨」(p.375), …  
b. uN「鬼」(p.67), diN「金〈セニ〉」(p.84), iN「戌〈イヌ〉」(p.36), aN「網」(p.20), kaN  
「神」(p.86), naN「波」(p.253), kaŋaŋaŋ「鏡」(p.74), hasaN「鋏」(p.276), …

## 3.4. 撥音化する環境

与那国方言の撥音は共通語の次の音に対応する。

- (9) a. 濁音, 鼻音の前の狭母音 (6a)  
b. 濁音, 鼻音の前の無声子音+狭母音 (6b, 7a)  
c. 濁子音+狭母音 (7b, 8a)  
d. 鼻子音+狭母音 (6c, 7c, 8b)

これらが撥音化するの、鼻音だけでなく濁子音も鼻音性を帯びていたことの反映と考えられる。(10)に撥音化の過程の概略を示す。

- (10) a. [ɪzari] > Ndai「潮干狩り」, [ɪdas-] > Ndas-「出す」, [ɪgok-] > [ɪgɔk-] > Ndug-「動く」,  
[ɪuma] > Nma「馬」, [ɪne] > Nni「米」, …  
b. [sɪbor-] > [ɲbor-] > Nbur-「絞る」, [pɪŋe] > [ɲŋe] > Ngi「髭」, [pɪdari] > [ɲdari] > Ndai「左」,  
[pũne] > [ɲne] > Nni「船」, [kɪnɔpu] > Nnu「昨日」, [kũmo] > [ɲmo] > Nmu「雲」, [jusũg-]  
> duŋg-「濯ぐ」, [musũb-] > muNb-「結ぶ」, [matũge] > maŋgi「睫毛」, [akɪnapi] > aŋnai  
「取引」, …  
c. [abũra] > aNda「油」, [kadũra] > kaNda「蔓」, [adũkar-] > aNKar-「預かる」, [nabik-] >  
naNK-「靡く」, [midũ] > miN「水」, [muŋi] > muN「麦」, [paŋi] > haN「足」, [tozĩ] >  
tuN「妻」, [warabĩ] > baraN「蕨」, [ebĩ] > iN「伊勢海老」, [augĩ] > uN「団扇」, …  
d. [nĩŋana] > Ngana「苦菜」, [mĩno] > Nnu「蓑」, [mũkasĩ] > NKaCi「昔」, [mĩso] > Nsu「味  
噌」, [kamĩnari] > kaŋnari「雷」, [tamĩna] > taNna「田螺」, [azamũk-] > adaNK-「宥める」,  
[amĩ] > aN「網」, [kamĩ] > kaN「神」, [namĩ] > naN「波」, [onĩ] > uN「鬼」, [zenĩ] > diN  
「金」, [inũ] > iN「戌」, [kaŋamĩ] > kaŋaŋaŋ「鏡」, [pasamĩ] > hasaN「鋏」, …

今、撥音化にかかわる母音の鼻音化のみ(10)に示したが、(10a, b)と(10c, d)からわかるように、鼻音と濁子音は前後の母音を鼻音化していたか、濁子音が伴うのは前鼻音であれば、久野(2003)が「入声音化」(p.222)というように、例えば [mĩdu] > [mĩd] > [mĩn] > miN「水」,

[warābi] > [warāb] > [warām] > baraN 「蕨」のような母音脱落と音節末子音の鼻子音化があったのかもしれない。

また、例外的ながら、Nda 「あなた」 (p.17) < \*ura (cf. 宮古方言 vva, 波照間方言 da, 伊江島方言 r'a) では撥音に鼻音も鼻子音も関わっていない。\*ura > \*uda [ūda] の変則変化によって撥音化した可能性もあるが、\*ura > [ra] > [da] > Nda の可能性も考えられる (中澤 2022a: 164)。同様に、\*izari > [zzari] > Ndai 「潮干狩り」、\*idas- > [ddas-] > Ndas- 「出す」のように重子音化と有声二重子音の回避による撥音化という可能性もあり得るが、\*adukar- > [akkar-] > \*aKar- 「預かる」あるいは \*adukar- > [aqgar-] > \*aNgar- (同) とならないことから、やはり濁子音には鼻音性があつたものとする<sup>14</sup>。

### 3.5. 撥音化しない例

(9) の条件を満たしても、(11) のように撥音化しない場合がある。

- (11) a. niCi 「北 (ニシ)」 (p.96), nuCi 「主」 (p.264), nuTi 「横糸 (ヤ)」 (p.361), miTi 「お神酒」 (池間 2017: 318), ...  
 b. iN 「戌」, kuN 「衿 (ケビ)」 (p.53), ciN 「頂上 (ツジ)」 (p.215), ciN 「墨」 (p.179), miN 「水」, muN 「麦」, ...

(11a, b) はともに直後に狭母音を含む拍がある。また、(11b) のように、2つの拍が撥音化の条件を満たす場合、後ろの拍が撥音化し、前の拍は撥音化しない。

## 4. 与那国方言の「促音」化

与那国方言の喉頭化音は語頭と語中に現れる。撥音化と並行的に、喉頭化音になる前には共通語の促音 /Q/ と同様の重子音の段階があつた (\*CVC > \*QC [CC?] > C?) と考える。そのため、語頭と語中の喉頭化音に対応すると考えられる「促音」化をここでは確認する。

### 4.1. 語頭での「促音」化

語頭での「促音」化は (12) のような語で見られる。

- (12) a. Ta 「舌」 (p.150), Ta 「蓋」 (p.302), Tu 「人」 (p.293), Kasi 「嘘 (スカシ)」 (p.45), Kuru 「袋」 (p.301), KuN 「使う」 (p.218), ...

<sup>14</sup> 閉音節化と音節末子音の鼻子音化を想定すれば、\*adukar- > [adkar-] > [ankar-] > aNKar- 「預かる」と鼻音性を認める必要はなくなる。八丈方言のヨリテ > ヨンテ > ンテ (金田 2012: 121) や関東方言に見られるスルカラ > スンカラ 「するから」などの撥音化はそのような例だから、撥音化のみから与那国方言に前鼻音があつたと推定することはできない。しかし、共通語の語中のガ行子音に /ŋ/ が対応すること、近隣の波照間方言に前鼻音があつたと推定される (Nakazawa and Yokoyama 2021: 97) ことから、与那国方言の濁音にも前鼻音があつたと考えてよいだろう。

- b. Ca「草」(p.107), Cu「糞」(p.108), Curi「薬」(p.108), Cabi「楔」(p.107), CaNguN「閉ざす〈フサグ〉」(p.237), …
- c. Cuma「昼間」(p.298), CaN「シラミ」(p.168), Cui「後ろ〈シハ〉」(p.45), CuN「交尾〈ツルビ〉」(p.123), …<sup>15</sup>

#### 4.2. 語中での「促音」化

語中での「促音」化は次のような語で見られる。

- (13) a. aTa「明日」(p.13), haKa「二十日」(p.280), huKa「二日」(p.304), aKuN「扱う」(p.16), …
- b. nuCaN「暖かい〈ヌカサ〉」(p.14), …
- c. uCu「後頭部〈ウシロ〉」(p.123), baCiruN「忘れる」(p.373), …

#### 4.3. 「促音」化する環境のまとめ

与那国方言の「促音」は共通語の(14)の音に対応する。

- (14) a. 無声子音+狭母音+無声子音 (12ab, 13ab)
- b. 無声子音+狭母音+/r/ (12c, 13c)

(14b)の母音は基本的に /i/ で, /u/ は /su/, /cu/ に対応する場合のみである。(15)に「促音」化の過程の概略を示す。

- (15) a. \*sita > /tta/ > Ta「舌」, \*puta > /tta/ > Ta「蓋」, \*pito > /tto/ > Tu「人」, \*sukasje > /kkasje/ > Kasi「嘘」, \*pukuro > /kkuro/ > Kuru「袋」, \*tukaw- > /kkaw-/ > Ka-「使う」, \*asita > /atta/ > aTa「明日」, \*patuka > /pakka/ > haKa「二十日」, \*putuka > /pukka/ > huKa「二日」, \*atukaw- > /akkaw-/ > aKa-「扱う」, \*kusa > /ssa/ > Ca「草」, \*kuso > /sso/ > Cu「糞」, \*kusuri > /ssuri/ > Curi「薬」, \*kusabi > /ssabi/ > Cabi「楔」, \*nukusa- > /nussa-/ > nuCa-「暖かい」, …<sup>16</sup>
- b. \*piruma > /ssuma/ > Cuma「昼間」, \*sirami > /ssamī/ > CaN「シラミ」, \*sirope > /ssowe/ > Cui「後ろ」, \*turubi > /ssubi/ > CuN「交尾」, \*usiro > /usso/ > uCu「後頭部」, \*wasure-

<sup>15</sup> \*/C[-voice]V[+high]r-/ は /ss-/ を経て /C-/ になったと考えられる (15bを参照)。

<sup>16</sup> \*kusa「草」以下は \*kusa > /kʷtsa/ > Ca「草」, \*kuso > /kʷtso/ > Cu「糞」, \*kusuri > /kʷtsuri/ > Curi「薬」, \*kusabi > /kʷtsabi/ > Cabi「楔」, \*nukusa- > /nukʷtsa-/ > nuCa-「暖かい」のように促音化とは異なるプロセスで破擦化した可能性もある。ikusa::iKuCa「戦」, kuse::huCi「癖」のような対応例はこのような解釈に有利にも見えるが、一方で \*ikusa「戦」, \*huse「癖」, \*ssa「草」がそれぞれ類似の動機(先行する無声化母音または摩擦音との異化)で並行的に破擦化した可能性もある。本稿では(15b)との関係から後者の立場を採る。また、仮に /ss-/ を経ずに /C-/ になったとしても, /ts/ という重子音の段階はあったものとする。



> /wasse(r)-/ > baCir- 「忘れる」, …

#### 4.4. 「促音」化しない例

(14) の条件を満たしても, (16) のように「促音」化しない場合がある。

- (16) a. CiCi 「肉 〈シ〉」 (p.258) (\*Ci), CiCi 「煤」 (p.176) (\*Ci), huCi 「ヨモギ 〈ツツ〉」 (p.364) (\*Ci), Ciri 「霧」 (p.103) (\*Ci), kuCi 「櫛」 (p.107) (\*Ci), kiCi 「崖 〈シ〉」 (p.76) (\*Ci), hiru 「ニンニク 〈ヒル〉」 (p.262) (\*Cu), …
- b. huKa 「二日」 (\*CiKa), …

\*sisi > /ssi/ > \*Ci となってよさそうだがそうはなっていない。(16) は全て直後に狭母音を含む拍がある。(16b) では, 第1音節は狭母音だが「促音」化せず, 第2音節が「促音」化している (\*putuka > /pukka/ > huKa)。

### 5. 考察

#### 5.1. 撥音化, 「促音」化の条件

3.5 と 4.4 から, 撥音化, 「促音」化する環境であっても, 後続する音節が狭母音の場合は変化しないことがわかった。

ところが, 後続する拍が狭母音でも, (17) のように撥音化, 「促音」化する例がある<sup>17</sup>。

- (17) a. Ngui 「鞞丸 〈フクリ〉」 (huguri, p.121), NbuCi 「膝 〈ツバシ〉<sup>18</sup>」 (cubusi, p.291), Nburu 「夕顔 〈ツフリ〉<sup>19</sup>」 (cuburi, p.355), …
- b. Kuru 「袋」 (hukuro), KuruN 「作る」 (cukuru, p.221), Kuju 「月 〈ツキヨ〉」 (cukujo, p.219), Curi 「薬」 (kusuri), Kuna 「ハルノノゲシ 〈フナ〉<sup>20</sup>」 (\*pukuna, p.286), Cuma 「昼間」 (hiruma), …

(17a) では狭母音前の拍が撥音化しているが, 狭母音—狭母音の次の拍も狭母音であり, 狭母音が連続している。このような場合, 3拍語の語頭の拍は撥音になり得る。このように, 撥音化は拍同士の相対的な「強さ」が関わると言える。

2拍語における拍の相対的な強さを (18) に示す。

<sup>17</sup> CuCu という連続に偏っているのに理由があるかは不明 (Cuma を含め後続母音は全て /u/)。\*/i/ と \*/u/ とで母音の脱落のしやすさに違いがあったためか。

<sup>18</sup> 「つぶし ①膝頭。ひざ。九州 (日葡辞書)・豊州 (物類称呼)・徳島・愛媛県新居郡大島・大分・福岡・老岐・対馬・鹿児島・南島。」 (東條編 1951: 549)。

<sup>19</sup> 「つぶろ ①粒。【中略】③ひょうたん。佐渡。」 (東條編 1951: 550)。

<sup>20</sup> 鳩間方言  $\text{pukuna}$  (加治工 2020: 1442) などから \*kukuna あるいは \*pukuna が再建される。

## (18) 拍の相対的な強さ (2 拍語)

非狭	狭	狭	非狭	狭	狭
強	弱	弱	強	強	弱

基本的に狭母音の拍が「弱」、非狭母音 (a, e, o) の拍が「強」だが、狭母音が連続する場合、前の拍が相対的に「強」となる (ともに非狭母音の場合は「強強」)。撥音化は弱の拍でのみ起こるとすれば、(11a) で撥音化しないこと、(11b) で2拍目が撥音化することの説明がつく。

また、(17a) から、少なくとも3拍語での狭母音の連続では、拍の相対的強弱は次のようになっていると考えられる。

## (19) 拍の相対的な強さ (3 拍語)

狭	狭	狭
弱	強	弱

(19) の環境で弱の両方が撥音化する例は得られていないが、NniN「ミカン〈クネボ〉」<sup>21</sup>(\*kunebu, p.329) のような例はある<sup>22</sup>。

「促音」化については条件の一般化が難しい。2拍語については撥音と同じく(18)の弱で生じる一語末の狭母音は「促音」化しないから事実上「狭—非狭」の場合のみ「促音」化する—が、3拍語については、(16b) と (16b) は同じ「狭—狭—非狭」の音環境で異なる変化を生じている。(16b) が例外だとすれば、撥音化とは異なり、3拍語での拍の相対的な強さは(20)のようになっているとみなせるだろう。

## (20) 「促音」化に関する拍の相対的な強さ (3 拍語)

狭	狭・非狭	狭・非狭
弱	—	—

すなわち、3拍語であれば狭母音を持つ語頭の拍は無条件で「弱」の扱いを受けるものと見られる。

「促音」化が撥音化より予測が困難なのは3拍語だけでなく、2拍語にも(21)のように一部例外が見られる。

<sup>21</sup> 「日国」のくねんぼ【九年母】(4巻 p.967) の〈なまり〉に「クネッポ〔紀州〕クネッポ〔紀州・和歌山〕クネブ〔周防大島・福岡・岩崎・鹿児島・大隅〕クネンブ〔島根〕クネンポー〔岡山〕」とある。

<sup>22</sup> NnuN「太鼓」(p.195) が \*tudumi に対応する (cf. 久野 2003:219) とすれば(19)の例となるが、2拍目の対応に問題がある (CidiN「鼓」(p.222) もありこちらが対応形と思われる)。

(21) Ti 「口」 (kuci, p.109), Ti 「月」 (cuki, p.219), Ku 「肺」 (ク) <sup>23</sup> (\*puku, p.272), Ci 「靴 (草鞋)」 (kucu, p.375), Ci 「釣り (釣り針)」 (curi, p.226), …

これらは \*kuti > [tʃi] > /Ti/, \*tuki > [tʃi] > /Ti/, \*puku > [kku] > /Ku/, \*kutu > [ssi] > /Ci/, \*turi > [ssi] > /Ci/ のように狭母音の連続にもかかわらず「促音」化が生じたと推定され、(16a) とは異なる対応を示している。3 拍語で語頭の狭母音を含む拍が無条件で「弱」の扱いを受けるのと対応し、2 拍語でも後続母音にかかわらず狭母音を含む拍は「弱」の扱いを受けることがあるものと見られる。ただし、(21) に該当する例は (16a) と比べ少数にとどまりあくまで例外と言える。

動詞は活用するため後続する母音の広さが変わるが、撥音化と「促音」化についてはどうなっているだろうか。調べたところ、(22) のようになっていた。

- (22) a. NmuN 「編む」 (kumu, p.21), NmuN 「汲む」 (kumu, p.111), Nmi 「澄む」 (sumu, p.181), Nmi 「摘む」 (cumu, p.224), …
- b. KuN 「聴く」 (kiku, p.95), KuN 「弾く」 (hiku, p.290), KuN 「吹く」 (huku, p.300), KuN 「突く」 (cuku, p.220), CuN 「切る」 (kiru, p.103), CuN 「知る」 (siru, p.103), muNbuN 「結ぶ」 (musubu, p.339), …
- c. umuN 「熟する」 (umu, p.161), umuN 「紡ぐ」 (umu, p.225), muguN 「剥く」 (muku, p.337), nuguN 「通す」 (nuku, p.235), …
- d. KuruN 「作る」 (cukuru, p.221), KumuN 「包む」 (kumu, p.222), …

(22a, b) より撥音化、「促音」化が起きているから、語幹末の狭母音は「弱」になると言える。しかし、(22c) では撥音化していない。(22a) は C<sub>[-voice]</sub>V<sub>[+high]</sub>C<sub>[nasal]</sub>-, (22c) はその他と音環境の条件が異なるが、adaNkuN 「宥める」 (アザムク), kaTaNkuN 「傾く」 (katamuku, p.82) などでは (22c) の muguN と同じ音条件の拍 (-muk-) が撥音化しているから、動詞の場合は語幹の長さも撥音化の条件に関わっていると見られる。また、(22d) では語幹末の狭母音が変化するのではなく語頭の音節が「促音」化している ([例] KuruN < [kkur-] < \*tukur-)。このことから、語頭での「促音」化が語幹末の変化に先んじて生じたと推定される。

母音の広さの違いによる拍の相対的な強さについては、上野 (2003) や松森ほか (2012) など、アクセントの共時的・通時的現象としてすでに指摘されており、アクセントだけでなく無声化や有声化といった分節音の変化にも関わっている (宮島 1961)。このように、与那国方言の撥音化、「促音」化から仮定される拍の相対的な強さという概念はアドホックなものではなく、広く日琉諸語の音変化の条件となっていることが予想される。

<sup>23</sup> 「ふく ①人畜の肺。南島 (八重垣)。②猪の肺臓。鹿児島県肝属郡。③鳥獣の腸。熊本。④魚の内臓。宮崎県児湯郡。」 (東條編 1951: 705)。

(23) 岩手県雫石方言：特殊モーラ (M) の他に、「○狭広」の「狭」が原則として核 (l) を担えない。

○広○：/サカナ= / /ホシザ[カナ/ /オドリ= / /ボンオ[ドリ/

○狭狭：/カスミ= / /ハルガ[スミ/ /シルシ= / /カギジ[ルシ/

○狭広：/クルマ= / /カタ[グルマ/ /ムスコ= / /バカ[ムスコ/

○MO：/バンド= / /ヘア[バンド/ /ボーシ= / /ワタ[ボーシ/

(上野 2003: 79 より)

このことは、通時的再建においても、音環境の考慮が必要なことを示唆している。

与那国方言の「非弱」位置の狭母音 \*i, \*u には撥音化、「促音」化が生じないため、非狭母音 \*e, \*o (> i, u) と合流している。そのため、この位置では狭母音 \*i, \*u も非狭母音 \*e, \*o も復元され得ることから、古形の推定が困難になる。

- (24) a. niCi 「北」 < \*nesi ~ \*nisi, nuCi 「主」 < \*nosi ~ \*nusi, nuTi 「横糸」 < \*noki ~ \*nuki, miN 「水」 < \*medu ~ \*midu, muN 「麦」 < \*mogi ~ \*mugi, iN 「戌」 < \*enu ~ \*inu, kiCi 「崖」 < \*kesi ~ \*kisi, hiru 「ニンニク」 < \*peru ~ \*piru, …
- b. kuN 「衿」 < \*kobi ~ \*kubi, kuCi 「櫛」 < \*kosi ~ \*kusi, huCi 「ヨモギ」 < \*potu ~ \*putu, huKa 「二日」 < \*potuka ~ \*putuka, …
- c. CiN 「墨」 < \*sumi, CiCi 「肉」 < \*sisi, CiCi 「煤」 < \*susu, Ciri 「霧」 < \*kiri, Ciru 「汁」 (p.169) < \*siru, Ciru 「筋 (ツル)」 (p.177) < \*turu, …

撥音化、「促音」化を離れて、一般に狭母音の前の母音は非狭母音に対応するよう見えても「非弱」位置の狭母音の可能性がある。(25) にそのような例を挙げる。

- (25) \*eri ~ \*iri 「西 (イ)」 (与那国 iri, p.259), \*eri ~ \*iri 「錐 (イ)」 (与那国 iri, p.102), \*eriko ~ \*iriko 「鱗 (イコ)」 (与那国 iTu, p.51), \*oni ~ \*uni 「ウニ」, \*omi ~ \*umi 「海」 (与那国 iN, uNnaga (ウミカ), p.49), \*omiko ~ \*umiko 「膿 (ウミコ)」 (与那国 uNTu, p.49), \*ori ~ \*uri 「瓜」 (与那国 ui, p.50), \*kezu ~ \*kizu 「傷」 (与那国 kidi, p.96), \*kotu ~ \*kutu 「靴」 (与那国 Ci 「草鞋」), \*nebu- ~ \*nibu- 「鈍い」 (与那国 niNsa- 「遅い」, p.63), \*nosum- ~ \*nusum- 「盗む」 (与那国 nuCim-, p.264), \*noru- ~ \*nuru- 「温い」 (与那国 nuru-, p.264), \*pedi ~ \*pidi 「肘」, \*pesu- ~ \*pisu- 「薄い (ヒサ)」 (与那国 hiCa-, p.45), \*pepiza ~ \*pipiza 「山羊 (ヒサ)」 (与那国 hibida, p.349), \*pemeki ~ \*pimiki 「喘息 (ヒキ)」 (与那国 himiKi, p.186), \*memeg- ~ \*mimig- 「叩く (ミグ)」 (与那国 mimiN- 「抓る, 指圧する」, p.223), \*memezu ~ \*mimizu 「ミミズ」 (与那国 dimimi, p.334), \*motukasi ~ \*mutukasi 「難しい」 (与那国 muCiKasa-, muCiKaCa-, p.338), …

(24), (25) は南琉球諸語でしばしば非狭母音相当の対応を示し (cf. 宮城 2003, 前新 2011, 富浜 2013, 渡久山・セリック 2020, 加治工 2020), このうちのいくつかは琉球祖語形あるいは日琉祖語形として \*e, \*o の非狭母音が再建されてきた (五十嵐 2021: 21)。

Pellard (2013) は次の対応に基づき日琉祖語 (PJ) および琉球祖語 (PR) に \*i と \*e, \*u と \*o を再建している。

表 2. PJ \*i と \*e の反映

OJ	<	PJ	>	PR	>	奄美	::	沖縄	::	宮古	::	八重山	::	与那国
i	<	*i	>	*i	>	ʔi, N	::	ʔi, i, N	::	ɿ, u, s, N, Ø	::	ɿ, N, Ø	::	i, N, Ø
		*e	>	*e	>	ʰi, i	::	ʰi, i	::	i	::	i	::	i

表 3. PJ \*u と \*o の反映

OJ	<	PJ	>	PR	>	奄美	::	沖縄	::	宮古	::	八重山	::	与那国
u	<	*u	>	*u	>	ʔu, N	::	u, N	::	u, N, Ø	::	u, N, Ø	::	u, N, Ø
		*o	>	*o	>	ʰu	::	u	::	u	::	u	::	u

(Pellard 2013: 84–85 より)

しかしながら、狭母音が連続する環境では琉球諸語間の音対応にずれが見られ、二次的な変化 (あるいは不変化) があつたと推定される<sup>24</sup>。

例えば、南琉球の宮古語伊良部島仲地方言 (富浜 2013) と多良間方言 (渡久山, セリック 2020) では、\*mi と \*me が (26) のように対応する。

- (26) a. 伊良部・多良間 am < \*ami 「網」, 伊良部 tsim, 多良間 kɿm < \*kimi 「黍 <キミ>」, 伊良部 mtasɿ 多良間 mtasɿ < \*mitas- 「満たす」, …
- b. 伊良部・多良間 ami < \*ame 「雨」, 伊良部 tsimi, 多良間 teimi < \*tume 「爪」, 伊良部・多良間 mipana < \*mepana 「顔 <メナ>」, …

そのため、伊良部・多良間 mim 「耳」からは \*memi が再建されるが、北琉球伊江島方言 (生塩 2009) の (27) の対応と niji:<sup>25</sup> 「耳」は、琉球祖語形を \*memi としては説明ができない。

- (27) a. ʔani: 「網」, tʰimi: [tʰimi:] 「黍」, ntʰafuɿ [ntʰafuɿ] 「満たす」, ndzatʰfuɿ < \*migak- 「磨く」, …
- b. ʔami: 「雨」, simi 「爪」, migujuɿ < \*megur- 「巡る」, …

<sup>24</sup> (26)~(29) は中澤 (2022b) で挙げたものから (誤りを訂正して) 引用した。

<sup>25</sup> ni と ji で対立はないが、引音を伴う場合と i 母音直後では口蓋化が顕著なためこのように表記されている。

伊江島方言の *ni* は \**mi* に対応し \**me* には対応しない。従って、伊良部島仲地方言と多良間方言の *mim* の第1音節は、\**mi* がそのまま保持されたものと考え<sup>26</sup>。

この他、伊良部 *piz̩* 多良間 *pidz̩* と伊江島 *t̩id̩ʒi* 「肘」の不一致については服部 (1979) で論じられていて、伊良部 *pinza* 多良間 *pinda* と伊江島 *t̩it̩id̩ʒa* 「山羊」の不一致についてはローレンス (2019) で論じられているが、服部 (1979) は \**pedi* > \**pidi* の逆行同化、ローレンス (2019) は借用のためと、それぞれ異なる説明をしている。しかしながら、これらも \**pidi*, \**pipiza* で後続の狭母音の影響による音対応のずれと考えれば、統一的な説明が可能となる。

このように、\**i* の変化が後続の狭母音によって阻止された結果、非狭母音 \**e* に対応するように見える例が生じる。(28) にそのように考えられる例を挙げる。

- (28) 伊良部島仲地方言 *in* (\**n*:) 「犬」, *īi* (\**i*:) 「錐 <イ>」, *īi* (\**i*:) 「西 <イ>」, *nīvkam* (\**nvkam*) 「遅い <ブ>イ」, *pītsi* (\**p̄itsi*) 「櫃」, *pīmitsi* (\**p̄imtsi*) 「喘息 <ヒ>キ」, *mī:tsi* (\**m:tsi*) 「右」, *mīi* (\**m̄i*:) 「海松」, …
- 多良間方言 *il* (\**l*:) 「錐 <イ>」, *il* (\**l*:) 「西 <イ>」, *nīs̩* (\**ns̩*) 「北 <ニ>」, *nīvea:l* (\**nvea:l*) 「遅い <ブ>イ」, *pīts̩* (\**p̄its̩*) 「櫃」, *mīts̩* (\**m̄ts̩*) 「道」, *mīl* (\**m̄l*:, \**m̄l̩*) 「海松」, …
- 石垣方言 (宮城 2003) *ʔī:ri* (\**ʔī:ri*) 「錐 <イ>」, *ʔī:ri* (\**ʔī:ri*) 「西 <イ>」, *k̄ītsi* (\**k̄itsi*, \**k̄īsi*) 「崖 <キ>」, *mītsi* (\**m̄itsi*, \**m̄ntsi*) 「道」, …

実際、「道」は伊良部島仲地方言では *mts̩i* (富浜 2013: 803)、「右」は多良間方言では *m̄l̩:ḡl* (渡久山, セリック 2020: 467)、「海松」は石垣方言では *b̄ī:ri* (宮城 2003: 840) など、ある方言で非狭母音のような対応を示しているが、他の方言では狭母音の対応を見せる例がある。

表 4. 南琉球諸語における \**i* ~ \**e* の対応の異同

	非狭母音相当	狭母音相当
道	多 ( <i>m̄its̩</i> ), 石 ( <i>m̄itsi</i> )	伊 ( <i>mts̩i</i> )
右	伊 ( <i>m̄i:tsi</i> )	多 ( <i>m̄l̩:ḡl</i> )
海松	伊 ( <i>m̄īi</i> ), 多 ( <i>m̄il</i> )	石 ( <i>b̄ī:ri</i> )
喘息 <ヒ>キ	伊 ( <i>p̄im̄itsi</i> )	多 ( <i>p̄l̩nk̄l</i> ), 石 ( <i>p̄īnḡi</i> )

同様に、\**u* の変化が後続の狭母音によって阻止された結果、非狭母音 \**o* に対応するように見える例が生じる。

- (29) 伊良部島仲地方言 *usi* (\**vs̩i*) 「牛」, *ussu* (\**vssu*) 「後頭部 <ウ>シ」, *usi* (\**vs̩i*) 「臼」, *um* (\**m*:)

<sup>26</sup> 伊江島方言の古形 (ないし北琉球祖語) で \**memi* > \**mimi* の逆行同化があった可能性もある (服部 1979 の \**pedi* > \**pidi* を参照) が、モモ「腿」, チチ「乳」, ホホ「頬」のように身体を表す語彙には重複形と見られる語形があることを考えれば、「耳」も \**memi* よりも \**mimi* と再建した方が無難だろう。

「膿」, **nugɔ:** (\*ngɔ:, \*nv:) 「拭う」, **nufum** (\*nfum) 「温む」, **nusɪ** (\*nsi) 「主」, **nusudu** (\*nsudu, \*nsidu) 「盗人」, **nusum** (\*nsum, \*nsim) 「盗む」, **fugɔ:** (\*fuv:) 「鞆丸〈フクリ〉」, **fukɔ:ru** (\*fufuru, \*fuffu) 「袋」, **musɪ** (\*msi) 「虫」, **musɪ:** (\*msi:) 「筆る」, **mussu** (\*mssu) 「筵」, **musɪkasɪkam** (\*mtsɪkasɪkam) 「難しい」, …

多良間方言 **tsɪbul** (\*tsɪv:) 「ヒヨウタン〈ツル〉」, **nukɪ** (\*nkɪ) 「貫き」, **nugu:** (\*ngu:) 「拭う」, **nufum** (\*nfum) 「温む」, **nusɪ** (\*nsɪ) 「主」, **nusɪdu** (\*nsɪdu) 「盗人」, **nusɪm** (\*nsɪm) 「盗む」, **fugul** (\*fuv:) 「陰囊〈フクリ〉」, **fukuru** (\*fufuru, \*fuffu) 「袋」, **musɪ** (\*msɪ) 「虫」, **mussɪ:** (\*mssɪ:, \*msɪ:) 「筆る」, **mussu** (\*mssu) 「筵」, **musɪkasɪɕa:l** (\*mtsɪkasɪɕa:l) 「難しい」, **musɪbɪ** (\*msɪbɪ) 「結ぶ」, …

石垣方言 **sukubu** (\*sɪkubu, \*sɪfubu) 「粃殻〈スクモ〉」, **nuɸumuɸu** (\*ʔɸumɸu) 「温む」, **nusɪ** (\*ʔnsi) 「主」, **nusumuɸu** (\*ʔnsumɸu, \*ʔnsimɸu) 「盗む」, **musɪ** (\*ʔnsi) 「虫」, **musɪɸu** (\*ʔnsɪɸu) 「筆る」, **musu** (\*ʔnsu) 「筵」, …

実際、「夕顔〈ツル〉」は沖縄本島今帰仁方言では ciNbu (仲宗根 1983: 291)、「袋」は徳之島浅間方言では hukKu (上野 2017: 225)、「貫き」は伊良部方言では ntsi (富浜 2013: 803) など、ある方言で非狭母音のような対応を示しているも、他の方言では狭母音の対応を見せる例がある。

このように、(25) は狭母音であっても「非弱」の位置に当たるから、\*e, \*o と \*i, \*u のいずれを再建すべきかは慎重に検討する必要がある (cf. 松森 2021)。

(24a, b) は母音が脱落しないだけでなく、狭母音の前に生じる子音の変化も生じていないが、(24c) では撥音化、「促音」化は生じないものの狭母音前での子音変化は生じていて、非狭母音は再建できない。(24a, b) を含め、母音変化と子音変化の相対年代を考える必要がある。

逆に、与那国方言で撥音化(「促音」化)することから、母音の広さが推定できる例もある。

(30) naNKa < \*nanuka 「七日」 (p.251), aNbuN < \*asub- 「遊ぶ」 (p.14), Nbi < \*tube 「尻〈ツビ〉」 (p.168), Nbu < \*tubo 「宝貝〈ツブ〉」, …

Nbi 「尻〈ツビ〉」, Nbu 「宝貝〈ツブ〉」の古形は本土方言形からは \*tubi, \*tubu の可能性もあるが、その場合は今回の議論から与那国方言形はともに \*CiN となるはずである。そのため、与那国方言の古形としては音節末に非狭母音が再建される。伊良部方言 tɸibi 「尻」のように他の琉球諸語でも祖語での語末の非狭母音の再建を支持し (\*tubi なら \*tsibi が期待される)、本稿の仮説に基づく与那国方言形からの再建が(琉球)祖語の再建にも有効なことが示される。

南琉球諸語には連用形と中止形(接続形とも)の対立がある(連用形は複合動詞や接辞を受ける形、中止形は単独で動詞句を作ったり文を終止したりできる形)が、与那国方言にはその形態的な違いはほとんど見られない(中澤 2021b)。

表 5. 南琉球諸語における「書く」の連用形と中止形

	連用形	中止形	cf. 継起形
伊良部	kafu, katsi	kattji	———
多良間	(kaki)	kaki:	kakitti:
石垣	kaki	kaki	kakitte
川平	kaki	kaki	kakijiti
与那国	<u>kaTi</u>	<u>kaTi</u>	kaTiTi

これは、中止形が連用形を兼ねるようになり、本来の連用形が消失したためである。しかしながら、古い連用形に由来する転成名詞には (31) のように部分的に対立が見られる。

(31) (ubu)jaN < \*(opo)jami 「大病」 (p.196) :: dami < \*jamje 「病気」 (p.297)

(hai)nuguCi < \*(kurapi)nokosi 「食べ残し」 (p.208) :: nugusjaN < \*nokosje- 「残した」 (p.268)

同様に、CiN 「死 (シ)」 と Nni 「死んで」 からそれぞれ \*sini と \*sinje (< \*sini+ari) が再建され、連用形と中止形の違いがあった (Nni 「死んで」 は連用形ではなくシアリ形に由来する) ことが撥音化する位置の違いによっても示される。

## 5.2. 音変化の相対年代

与那国方言では祖語の \*Ci, \*Cu のみ撥音化 (あるいは「促音」化) するため、\*e > i, \*o > u という狭母音化の前に撥音化 (あるいは「促音」化) が生じたことになる<sup>27</sup>。

(12b) から、\*/C<sub>[-voice]</sub>V<sub>[+high]</sub>r-/ の「促音」化は \*kir-, \*pir-, \*sir-, \*sur- などには生じていて \*kur-, \*pur- には生じていないから、\*su, \*zu, \*tu, \*du が \*si, \*zi, \*ti, \*di と合流した後の変化と考えられる。また、(24c) では \*ki, \*si, \*su, \*tu > Ci [ʧi] の子音変化が生じていることから、\*su, \*zu, \*tu, \*du の \*u および \*i は与那国方言でも恐らく [i] と中舌母音化し、\*i の前での子音変化がいち早く起こったものと考えられる。その理由として、\*i の前の変化が i の無声化 (\*si > [s̺i~sz~ss]), 中澤 2022a) という、i 自体の自律変化 (他の音素と関係なく独立して起きた変化) によって生じたもののためと見られる。

(17) では後続母音が /u/ に偏っているように見える。\*/o/ > /u/ の時期と関わるかもしれない (一部の環境では \*u と \*o の合流が早かったため、\*o と合流した \*u が非狭母音相当として振舞った) が、なお検討を要する。

以上をまとめると、次のような音変化の相対年代が推定される。

(32) a. \*u > i / { \*s, \*z, \*t, \*d } \_\_

<sup>27</sup> 久野 (2003: 223) は \*e, \*o の狭母音化後に撥音化が生じたと推定しているようにも読める (そのため主母音が \*a 以外の音節はすべて撥音化し得ることになる) ため、この点は強調しておく必要がある。



- b. \*t̥i > \*s̥i, \*d̥i > zi
- c. \*i > i
- d1. {\*k̥i, \*p̥i, \*s̥i}r > C [t̥ʰ] / \_\_V<sub>[-high]</sub>
- d2. {\*k̥i, \*p̥i, \*s̥i}r > C<sub>r</sub> [t̥ʰir] / \_\_V<sub>[+high]</sub>
- d3. \*V<sub>[+high]</sub> > Ø / \_\_CV<sub>[-high]</sub>
- d4. \*C<sub>[nasal]</sub>V<sub>[+high]</sub> > N / \_\_#
- e. \*e > i, \*o > u

### 5.3. 他方言での類例

松森 (2021) は北琉球諸語での撥音化のうち、鼻音始まりの拍の撥音化のみ後続母音の広さに関わるとする。与那国方言は \*V<sub>[+high]</sub>, \*C<sub>[-voice]</sub>V, \*C<sub>[+voice]</sub>V, \*C<sub>[nasal]</sub>V いずれの撥音化も母音の広さに関わっているように見える点で異なるが、後続母音の広さが条件となる点は共通する。

本土方言でも、例えば淡路方言の撥音化と促音化は、基本的に「狭—非狭」の連続で起きている。

表 6. 淡路方言の撥音化、促音化の例

「付き合い」	[tsukiai]	(*)/cuki#ai/	::	[tsukkjai]	/cuQkjai/
「打ち合う」	[utʃiau]	(*)/uci#au/	::	[utʃʰau]	/uQcjau/
「空き家」	[akija]	(*)/aki#ja/	::	[akkja]	/aQkja/
「年寄り」	[toʃijori]	(*)/tosi#jori/	::	[toʃʰori]	/toQsjori/
「松脂」	[matsujani]	(*)/macu#jani/	::	[matʃʰjani]	/maQcjani/
「団扇」	[utʃiwa]	(*)/uci(#)wa/	::	[utʃʰa]	/uQcja/
「闇夜」	[jamijo]	(*)/jami#jo/	::	[jammjo]	/jaNmjo/
「面白い」	[omoʃiroi]	(*)/omosiroi/	::	[omoʃʰoi]	/omoQsjoi/
「こちら」	[koʃira]	(*)/kocira/	::	[kotʃʰa]	/koQcja/
「別条」	[betsuʒo:]	(*)/becuzjoR/	::	[betʃʰo(:)]	/beQcjo(R)/
「教える」	[oʃieru]	(*)/osi.eru/	::	[osseru]	/oQseru/
「鰹」	[katsuo]	(*)/kacu.o/	::	[kattso]	/kaQco/
「竹輪」	[ʃʰikuwa]	(*)/ciku(#)wa/	::	[ʃʰikka]	/ciQka/
「忘れる」	[wasureru]	(*)/wasureru/	::	[wasseru]	/waQseru/
「縛れる」	[motsureru]	(*)/mocureru/	::	[mottseru]	/moQceru/
「御馳走」	[goʃiso:]	(*)/gocisoR/	::	[gottso(:)]	/goQco(R)/
「一膳」	[iʃizen]	(*)/ici(-)zeN/	::	[ittsen]	/iQcen/
「手伝い」	[tetsudai]	(*)/tecudai/	::	[tettai]	/teQtai/
「おじさん」	[oʒisan]	(*)/ozi(-)saN/	::	[ossan]	/oQsaN/

(中澤 2021a: 175 より)

これらから示唆されるように、撥音化、促音化といった音変化は、変化する拍自体の音韻的特徴だけでなく、前後の音との関係、すなわち拍の相対的な強弱も大きく関わる現象と言える。

一方で、拍の相対的な強弱については言語間で違いもあると考えられる。例えば、\**tubusi*「膝」は与那国方言では *NbuCi* と語頭が撥音化するが、与論方言では *ciNsi* (菊・高橋 2005)、伊江島方言では *šiNsi* (生塩 2009) と 2 拍目が撥音化している。シキシ「色紙」、キシクシャ「寄宿舎」のように連続する拍が無声化する場合、どの拍が無声化するかには方言差、個人差がある<sup>28</sup>ように、撥音化、促音化にも方言差（個人差）があることが予想される<sup>29</sup>。与那国方言に見られる例外も、個人差の影響が大きかったであろう人口が少なかった時代の反映や、現在は見られない集落間の言語差の痕跡の可能性<sup>30</sup>もあるかもしれない。

与那国方言の *kibuNCi*「煙」(p.118) はやや奇妙な形だが、これも相対的な強弱の揺れを反映していると思われる。*\*kebusi* の第 2 音節は、特に第 1 音節が非狭母音であることから、いったんは奥武方言 *kinji* (『奥武方言』編集委員会 2019: 204) のように撥音化(入声化)しかけた (*/keḃsi/*) が、後ろが狭母音のため非弱環境にあたり、不完全に回帰したため */ḃ/ > /buN/* となったと見られる。これも、撥音化(促音化)がその拍自体の音韻的特徴で決まるのではなく、前後の音との関係で生じる変化であることを示唆している。

## 6. まとめ

以上、論じたように、与那国方言の撥音化、「促音」化(喉頭化音化)の条件には、松森(2021)が北琉球諸語で指摘したのと同様に後続する拍の母音の広さ(それに加え語形の拍数)が関わり、上野(2003)のいう拍の「弱」(強弱)の概念(母音の相対的な広さによって拍の強弱が決まる)が支持される結果となった。与那国方言では、撥音化と「促音」化の条件は少し異なるものの、おおよそ次のようにまとめられる。

撥音化は狭母音であれば起きるのではなく、後続母音の広さや語形の長さも関わる。

「促音」化は撥音化に比べると例外が多いが、やはり後続音の母音の広さと語形の長さが条件に関わる。

一方で、条件を満たしていても撥音化または「促音」化しない場合が(32)のように多々ある。このような「変化しない」場合の一般化は今のところ不可能である。東京方言では母音の無声化がかなり規則的に起こる一方、あくまで随意規則であるのと同じような性質が与那国方言の撥音化または「促音」化にあるためかもしれない。

音変化の相対年代の厳密な検討のほか、借用や位相差、音変化の規則化の限界など、様々な要因を考える必要がある。これらは今後の課題である。

<sup>28</sup> 無声化が連続して起こるのは避けられる傾向があり、無声化し得る拍が連続する場合、東京では 1 拍目は無声化しやすく、形態素境界が後続する拍は無声化しにくい(『NHK 日本語発音アクセント辞典 新版』解説)。

<sup>29</sup> 「するの」におけるスルンとスンノの違いのように類例は他にも挙げられる。

<sup>30</sup> 人口が多ければ個人に変異があっても多数派によって次世代へ引き継がれる可能性は低くなるだろうが、人口が少ない場合は偶発的に継承されやすくなるだろう。*daNduN*~*daNburuN*「壊れた」(p.135) のような二重語がいくつか確認されるのも、異なる音変化を生じた方言が後に合流したことを示している可能性がある。

## (33) 撥音化, 「促音」化の条件を満たすが変化していない語例

aCida「足駄(下駄)」(asida, p.116), aCimir-「集める」(acume-, p.16), aCiras-「暖める(ウラス)」(\*aturas-, p.14), arudi「主」(aruzi, p.23), bidiri「賓頭盧(霊石)」(biNzuru, p.370), Cibui「壺」(cubo, p.224), Cibui「冬瓜(シブ)」(\*siburi, 池間 2017: 168), Cibusi「潰し」(\*tubusje, 池間 2017: 168), Cidi「頂上(ツヅ)」(\*tuzi, p.215), CidiKir-「続ける」(cuzuke-, p.222), Cidimir-「片付ける(シズメル)」(\*sizume-, p.81), CidiN「鼓」(cuzumi, p.222), Cidiri「硯」(suzuri, p.177), Cim-「済む(終わる)」(sum-, p.71), Cim-「積む」(cum-, p.224), Cima「島」(sima, p.155), Cima「相撲」(\*sumau, 池間 2017: 168), Cimu「肝」(kimo, p.92), Cimu「下(台所)」(simo, p.170), CinaN「砂」(suna, p.178), Cinasa-「幼い(チナ)」(\*tinasa-, 池間 2017: 167), Cini「脛」(sune, p.178), Cimi「罪」(cumi, p.224), Cir- ~ CiC-「擦る」(sur-, p.128), Cira「面(顔)」(cura, p.74), Ciri「釣瓶」(\*turupe, p.226), CiruCi「印」(sirusi, p.169), daCimi「休み(休日)」(jasumi, p.100), darabu「テリハ木(ヤラブ)」(\*jarabu, p.231), dasiKi「屋敷」(jasiki, p.351), dudir-「譲る」(juzur-, p.356), dusiKi「スキ(スキ)」(\*jusuki, p.177), hadi「恥」(hazi, p.276), hadi「はず」(hazu, p.278), hadimar-「始まる」(hazimar-, p.277), hadimir-「始める」(hazime-, p.277), hidiri「傷跡(ホヰ)」(\*pideri, p.96), hima「暇」(hima, p.295), huCi「癖」(kuse, p.108), huda「札」(huda, p.302), hudi「筆」(hude, p.304), huguN「福木」(hukugi, p.300), iguN「銚」(igomo, p.348), iKuCa「戦(戦争)」(ikusa, p.186), kabi「紙(カビ)」(\*kabi, p.86), kabuCi「頭上運搬用具(カブシ)」(\*kabusiri, 池間 2017: 77), kaCimasa-「姦しい」(kasimasi-, p.373), kagudi「顎(カコズ)」(\*kakozu, p.12), kidi「傷」(kizu, p.96), kubu「蜘蛛(コブ)」(\*kobu, p.111), kuCa「フィラリア(カ)」(\*kusa, p.299), kudi「麴」(\*kauzi, p.122), kudi「釘」(kugi, p.106), kudi「籤」(kuzi, p.107), kudi「葛(澱粉)」(kuzu, p.232), muCiKasa-~muCiKaCa-「難しい」(mucukasi-, p.338), mugu「婿」(muko, p.337)<sup>31</sup>, naCiKasa-「懐かしい」(nacukasi-, p.249), nibu「柄杓(ネブ)」(\*nebu, p.291), nidi「右」(migi, p.329)<sup>32</sup>, nuCim-「盗む」(nusum-, p.264), nugum-「温む」(nukum-, p.14), nuKuCa-~nuKusa-「ぬくい(暖かい)」(nukusa-, p.14), sagasiKi「盃」(\*sakatuki, p.137), sidasa-「涼しい(スタシ)」(\*sudasi-, p.177), siKama「仕事(カマ)」(\*sukama, p.148), siKara「力」(cikara, p.212), siKarir-「光る」(\*pikare-, p.289), siKu「菊」(kiku, p.95), siTu「苞(土産)」(cuto, p.335), tabi「旅」(tabi, p.207), tabi「足袋」(tabi, p.207), tiduguN「拳骨(テズクミ)」(\*tezukumi, p.120), udir-「怖じる(敵わない)」(ozi-, p.84), wasiKi「天気(ウツキ)」(\*uwatuki, p.232)

<sup>31</sup> 語頭が \*Ngu と撥音化しないのは \*moko に対応するためと考えられる。

<sup>32</sup> 首里 niziri (国立国語研究所編 1963: 421) のように、琉球諸語には \*migiri ~ \*nigiri に対応すると思われる形式が見られる。与那国方言では nugudi「鋸」(p.268) のように giri は (\*giri > /di:/ を経て) di に対応するから, nidi も \*migiri または \*nigiri に対応すると考えられる。

## 本稿で用いた記号（※引用部分は除く）

- [ ] : 音声表記。音韻的な表記を含み得る。〔例〕 [d̥uaruN] 「弱る」
- [ / ] : 推定音声表記。通時的変化を説明する場合に用いる。〔例〕 [wasse(r)-] 「忘れる」
- // : 音韻表記。自明な場合は省略する。〔例〕 /d̥waruN/ 「弱る」
- <, > : 変化。〔例〕 \*piruma > Cuma 「昼間」
- ~ : 音声や語形の揺れ。〔例〕 daNduN ~ daNburuN 「壊れた」
- :: : 対応。〔例〕 mukasi :: NKaCi 「昔」
- : 接辞境界。〔例〕 mimiŋ- 「抓る, 指圧する」
- ◇ : 対応形。
- \* : 再建形（音韻表記）の前に付ける。
- × : 正しくない予測形の前に付ける。
- † : 確認できない形式の前に付ける。かつては存在したが現在は見られない形式を含む。
- 【】 : 筆者による補足。

## 引用文献

- 五十嵐陽介 (2021) 「分岐学的手法に基づいた日本語・琉球語諸方言の系統分類の試み」『フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史』: 17-51.
- 池間苗 (2003) 『与那国語辞典』与那国町: 私家本.
- 池間苗 (2017) 『与那国ことば辞典』(第2版) 与那国町: 私家本.
- 上野善道 (2003) 「アクセントの体系と仕組み」『朝倉日本語講座3 音声・音韻』: 61-84.
- 上野善道 (2010) 「琉球与那国方言のアクセント資料 (1)」『琉球の方言』34: 1-30.
- 上野善道 (2017) 「徳之島浅間方言のアクセント資料 (4)」『国立国語研究所論集』13: 209-242.
- 『奥武方言』編集委員会 (編) (2019) 『奥武方言』南城市: 奥武区自治会.
- 生塩睦子 (2009) 『新版 沖縄伊江島方言辞典』国頭郡伊江村: 伊江村教育委員会.
- 加治工真市 (2020) 『鳩間方言辞典』立川: 国立国語研究所.
- 金田章宏 (2001) 『八丈方言動詞の基礎研究』東京: 笠間書院.
- かりまたしげひさ (2013) 「与那国語におきた音韻変化」『琉球アジア社会文化研究』16: 60-81.
- 菊千代, 高橋俊三 (2005) 『与論方言辞典』東京: 武蔵野書院.
- 久野真 (2003) 「与那国方言の撥音」『第4回「沖縄研究国際シンポジウム」ヨーロッパ大会 世界に拓く沖縄研究』: 215-224.
- 国立国語研究所 (編) (1963) 『沖縄語辞典』東京: 大蔵省印刷局.
- 東條操 (編) (1951) 『全国方言辞典』東京: 東京堂出版.
- 渡久山春英, セリック・ケナン (2020) 『南琉球宮古語多良間方言辞典』立川: 国立国語研究所.
- 富浜定吉 (2013) 『宮古伊良部方言辞典』那覇: 沖縄タイムス社.
- 中澤光平 (2021a) 「淡路方言の音節融合の共時的・通時的分析」『東京大学言語学論集』43: 159-182.

- 中澤光平 (2021b) 「『どうなんむぬい辞典』に見られる現在の与那国方言の諸特徴」日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成 令和3年度第2回オンライン研究発表会 (発表資料).
- 中澤光平 (2022a) 「与那国方言の音韻変化と形態変化」『国立国語研究所論集』22: 89–111.
- 中澤光平 (2022b) 「琉球祖語における非狭母音 \*e, \*o の再建の再検討」日本言語学会第164回大会 (予稿集 pp. 373–378).
- Nakazawa Kohei and Yokoyama Akiko (2021) Interesting sounds and sound changes in Japonic. In: Hiroyuki Suzuki and Mitsuaki Endo (eds.) *Studies in Asian and African Geolinguistics*, 93–101.
- 仲宗根政善 (1983) 『沖縄今帰仁方言辞典：今帰仁方言の研究・語彙篇』東京：角川書店
- Pellard, Thomas (2013) ‘Ryukyuan perspectives on the proto-Japonic vowel system.’ In: Frellesvig, Bjarke, Sells, Peter (eds.) *Japanese/Korean Linguistics* 20. 81–96.
- 前新透 (2011) 『竹富方言辞典』石垣：南山舎.
- 松森晶子, 新田哲夫, 木部暢子, 中井幸比古 (編著) (2012) 『日本語アクセント入門』東京：三省堂.
- 松森晶子 (2021) 「沖縄語首里方言の音節構造の変化と祖語の母音の音価推定」対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」プロソディー研究班 2021 年度前期オンライン発表会 第6回 (発表資料).
- 宮城信勇 (2003) 『石垣方言辞典』那覇：沖縄タイムス社.
- 宮島達夫 (1961) 「母音の無声化はいつからあったか」『国語学』45: 38–48.
- 与那国方言辞典編集委員会 (編) (2021) 『どうなんむぬい辞典 第2版』八重山郡与那国町：与那国町教育委員会.

# Elision of Close Vowels in the Yonaguni Ryukyuan: Conditions and the Relative Chronology of Phonological Changes

NAKAZAWA, Kohei

kohein@shinshu-u.ac.jp

**Keywords:** Yonaguni Ryukyuan, phonological change, phonological rules, glottochronology, relative strength

## Abstract

In this paper, I analyze and consider the elision of close vowels in the Yonaguni dialect spoken in Yonaguni island, Okinawa prefecture. In the Yonaguni dialect, elision of close vowels has historically occurred, resulting in a change to N (moraic nasal) and glottalized consonants, such as in *Nnu* ‘yesterday’, *NKaCi* ‘old days’, *Ta* ‘lid’, and *Kuru* ‘bag’. While elision of close vowels is widely observed in the Yonaguni dialect, there are some cases where close vowels did not drop such as in *niCi* ‘north’, *nuTi* ‘weft’, *kiCi* ‘cliff’, and *huCi* ‘mugwort’. Also, it is not clear which syllable(s) will change if multiple syllables have close vowels, such as in *muN* ‘wheat’ (cf. *Ndu* ‘groove’) and *CiN* ‘death’ (cf. *Nni* ‘die (converb)'). Therefore, based on published materials, I analyze the conditions of the elision of close vowels in the Yonaguni dialect and consider the relative chronology. I find that the following two conditions are related to the sound change: 1. the aperture of the vowel in the succeeding syllable, and 2. the length of the word. I note that the aperture of vowels may be a condition for phonological change not only of the Yonaguni dialect but also of other Ryukyuan languages and the Japanese dialects.

(なかざわ・こうへい 信州大学)